

都と異界の狭間、深泥池・市原野・鞍馬・貴船
 ——矛盾からの再生——

Borderland Where Outcasts Revive:
 Mizorogaike, Ichiharano, Kurama and Kibune in Kyoto

ウェルズ 恵子*

Abstract

This essay introduces Medieval legends which are situated in the outskirts of Kyoto to highlight that people visited there to meet or receive the messages of Buddha, gods, spirits of the deceased, or supernatural creatures. These legends demonstrate that persons who no longer fit in the values of the capital might find refuge in the borderland between the capital and the wild. They speak out their emotions and thoughts to reveal that the values of the capital oppress them. They are more often women, and are either old, solitary, or abnormal in talent or in behavior. After the exchanges of their emotions and thoughts with those who live in the capital, they find consolations or a way out of their problems by the help of Buddha, god or some supernatural power. These stories are heavily loaded more with Japanese Medieval folk beliefs than Buddhism. This essay concludes that in the world of the Medieval legends the outcasts and the unfit have chances to appeal themselves to the sacred as well as to the audience of the stories when they are in the marginal areas of the capital Kyoto, and that these oppressed personas would regain a new life there.

* 立命館大学文学部教授

はじめに

京の都の周縁は、表舞台から放逐された者たちの居場所である。鳥辺野、化野、蓮台野（紫野）は葬送の地であったし¹⁾、建礼門院が出家したのは大原野である。そして市原野は、生者の世界から疎外された人間の魂のうち、尋常ではない強い魂がよみがえって声を上げる場所であった。大原野に至る八瀬を北東に、紙屋川と船岡山に挟まれた蓮台野を西において、現在の地下鉄烏丸線北山駅から鞍馬街道を北へ上ると10分ほどで深泥池に着く。京都御所からは4~5キロの距離、昔の人なら十分に徒歩圏内にある。池の西側は上賀茂狭間町といい、上賀茂神社の社中がここで終わることを記している。その町名がいつから使用されているかは未確認だが、深泥池周辺は、神の力が及ぶ秩序の世界と鬼など異界の力が活動できる世界との狭間の空間であると思われていたのではなかろうか。そして市原野は、深泥池から鞍馬・貴船に至る地域、現在の京都市左京区静市周辺にあたり、伝説の多い土地である。

中世から近世にかけての市原は草深かった。他方、深泥池から北へと市原野に行く鞍馬街道は、都を発して山間部を抜け丹波、丹後へ通じている。その意味でも市原野は、都の文化圏と山間部や日本海側の文化圏との境界にあって、人が行くことはできるが制御しきれない空間であった。伝説においては、この地で人は人ならぬ者と会い、都から放逐された老人は声をあげ、亡霊は喚び醒まされ、無念に苦しむ魂は鬼と化す。そうして、生者の世界の矛盾と歪みをその身に現して浄化する。市原は、神のいる鞍馬・貴船の一手前、そこへ通じる急坂な連絡路があったところだ。本稿では、市原野から鞍馬・貴船を舞台としている伝説と謡曲を扱い、この空間が、都の秩序が生み出す矛盾への批判を映す鏡であることを論じたい。

通小町——^{ふだらくじ}補陀落寺（小町寺）

「花の色は うつりにけりな いたづらに わが身世にふる ながめせし
まに」という和歌であまりにも有名な小野小町は、六歌仙時代の美女才女の
代表として知られる。その一方で、老いて零落し^{ススキ}薄の生い茂る野で行き倒れ
て死んだという伝説にもなっている。伝説はひとつではなく小町伝説群と呼
んでよいほどのバリエーションがあり、老女小町にまつわる伝説を持つ土地
は、京都周辺はもちろんのこと東北各県にも及ぶことが錦仁の研究で明らか
になっている。そうした伝説はどれも、宮廷での小町の栄華と老いた後の貧
窮を対照させて悲哀を深めている。小町伝説は、実在の小野小町とは関係の
ない『玉造小町子壮衰書』（11世紀前半までに成立）²⁾の影響を受けている
とされ、唱導師らが口伝したり能に取り上げられたりしているうちに、数々
のバリエーションが誕生したらしい。14世紀を中心に成立した謡曲の演目にも
複数の小町物があり³⁾、データベースで筋書き等による上演確認ができる
18世紀から19世紀にかけては、「小町」を題材にした歌舞伎や浄瑠璃の演目
が盛んに上演されていたことが見受けられる。さらに20世紀でも小町歌舞
伎の上演は絶えることがなく、21世紀になっても、筆者がデータを確認した
平成26年（2014）までほぼ毎年何らかの公演が行われている。近年では舞
踏、ミュージカルといった芸種の広がりも見受けられる。⁴⁾

観阿弥の作であるとされる謡曲「通小町」⁵⁾は、八瀬で修行をしている僧
が、ある老女に声をかける場面で始まる。この老女は、修業する僧に木の実
や薪を届けにきていた。僧が老女に名を尋ねると、「市原野のあたりに住む
女にて候」と彼女は答える。さらに名を問われると「恥づかしや ^{おの}己が名を
^{おの}己（小野）とは言はじ、すすき生ひたる、市原野べに住む姥ぞ」と名のった
のちに、自分の弔いをしてほしいと僧に頼んで消えてしまう。彼女は、小野
小町の亡霊だった。

僧が市原野へ赴き小町の弔いを始めると、小町の成仏を妨げようとするも

う一つの亡霊が現れる。深草の四位の少将である。深草少将との逸話は小町伝説の一つに基づいており、その伝説によれば、深草に住む四位の少将が小町に求愛するものの意を遂げずに死んだのだという。少将は、百夜通ってくれば百夜目にあなたの意のままになろうと小町に言われ、通い続けたが九十九夜目に意を果たさないまま無念の死を遂げる。これは美人驕慢伝説群の一つで、小町は少将が寄せる想いをないがしろにした罪で不幸な余生を送るとされる。

「通小町」では、僧の弔いで小町が成仏しかけたところへ深草少将の亡霊が、小町を成仏させたなら恨むぞと僧に詰め寄る。煩惱に苦しむ自分と小町は、二人でそうして苦しんでいるのに、小町だけ抜け駆けて成仏してしまったら自分はなおのこと悲しいというのである。小町は「人の心は白雲の、われは曇らじ心の月」と謡い、いまにも救われようとする。その小町に、深草少将は、人の無念とはこうしたものかと思わせる言葉と姿ですが縋りつく。

さらば煩惱の犬となって、打たると離れじ、恐ろしの姿や、たもと袂をとって引きとむる、引かるる袖も、控ふる我が袂も、ともに涙の露、深草の少将。

二人の亡霊が伝説に聞く小野小町と深草少将であると、僧が飲み込めたとみるや、少将は百夜通いの様を再現して見せる。戻った時間の中で少将が、最後の夜に祝言の盃をどうしようかと思いを馳せた時、仏の戒めだから酒はやめようと考えた。この瞬間、仏道が成って、少将と小町は共に成仏する。

「通小町」は、こうして唐突に終わる。若く活発な時期は短く、そのあとに長い苦しい人生とさらに長い修羅の無時間を、小町の霊はさまよった。悟りは不意に開けて煩惱は跡形もなく霧散する。大事なものは、眼前で再現される彼らの過去を追体験する僧＝生者がいたことである。小町と少将の霊だけでは救われることは叶わず、亡霊を弔う者がいたからこそ二人は仏道に導か

れた。「通小町」における市原野はその舞台、つまり死者と生者の交流および死者の魂が永遠への甦り^{よみがえり}を果たす舞台なのである。

それにしても、人々はなぜ、小野小町という才色兼備の女性の行く末をこれほどまで不幸な結末に仕立て、彼女が都ではなく寂しい野辺で孤独に果たと信じたいのであろうか。そして彼女の供養塔が近畿から東北へ至る各地にあるほどに⁶⁾、小町が愛されつつ憐れまれもしている、そしてその霊が畏れられているわけは何なのだろう。市原野の補陀落寺は小町終焉の地と伝えられ、彼女の供養塔と少将の供養塔、および小町の姿見井戸がある。井上頼寿の『京都民俗志』⁷⁾によれば、清閑寺の近くにも東山小町寺と呼ばれる寺がかつてあり、小野小町姿見井があったという。

小野小町の栄華と落魄という伝説の広がりには、小野一族の移動や口伝した芸人たちの移動が一つの理由にあげられ、さらに「栄華を誇るな」というモラルのわかりやすさと庶民への受け入れやすさ、および美しい女性や聡明な女性に対する仏教的な敵愾心、警戒心など、複数の要因が入り混じっていることは間違いない。それに加え筆者は、京都を愛した者たちの目線から、もう一つの仮説を立てたい。平安時代が終わると京都は長期にわたって戦乱の炎を浴びた。江戸時代になってようやく平和が訪れたときには、政治の場は江戸に移り、商業も新しい文化も江戸を中心に発展していくようになる。その移り変わりの中で、京都はかつての栄華を失った。その京都と、平安時代を代表する歌人の小野小町を重ねて考えることはできないだろうか。すなわち、小野小町のかつての美貌は平安京への理想化された郷愁を呼び起こし、老齢と落剥は時代の推移に対する割り切れなさや達観を表現している。さらに、後述する観阿弥の「卒塔婆小町」は、老いてもなお類まれな知性と洞察を失わない人物として小町を登場させている。小町が京都の暗喩であるなら、戦乱で傷つき勢いを失っても京は文化と知の中心地であるという、作者および鑑賞者の意識が読み取れなくもない。少なくとも小野小町伝説では、栄えある日々を送った者の<誇りある>落剥というテーマが都の周縁を

舞台にして繰り広げられるところが大事なのであり、人々の京都への特別な思いがあってこそ、小町伝説は広く語り継がれたのではなかろうか。

小町は美人で驕慢だったから老いて不幸になったんだというのは、確かに一つの有力な解釈ではあるけれども、小町を犯し難い美女としたのも伝説作者の民衆である。しかも、驕慢な小野小町は描かれたことはなく、むしろ深草少将を始めとする求愛者とは交流しつつも超越的な距離を取った独立した人格として、伝説には語られている。されば伝説の小野小町が具現しているのは、優れて美しいとともに不条理な苦難に見舞われず孤高の時を俗世で過ごした者への民衆の憧れと、女性であるために社会的には下位の人間として時の推移に翻弄されるその有限性なのである。彼女の伝説が、市原野をはじめとする境界域に根付くのはそのためであろう。



小町寺（補陀落寺）



穴目の薄



小町姿見井

卒塔婆小町——鳥辺野

謡曲の代表作である「卒塔婆小町」⁸⁾は、舞台は市原野ではないものの、伝説の小野小町が平安京への郷愁と愛惜を体現しているとわかる作品である。本作も、観阿弥によるものと考えられている。「卒塔婆小町」の舞台である鳥辺野は、やはり都の周縁（洛外）に位置する葬地であり、いはば死者と生者の出会う空間であった。ここに現れる小町は亡霊ではないが、当時の感覚からすれば、死ぬことが叶わぬかとさえ思える高齢の老女で、墓所の野辺ににいることから、生者と死者の間に存在している。「卒塔婆小町」では、過去と現在が分かち難く重層することや、永遠の平和をもたらす仏心と煩惱のとりこである少将の心が、せめぎ合うように小町の心に侵入してくる様を、シテの老女小町がひとりで演じきる。

物語は、路傍の卒塔婆に老女が腰かけているところを、行きがかりの僧が見咎めるところで始まる。そこには風化した死の匂いが漂う。卒塔婆は仏体をかたどった板なのだから見れば仏だとわかるであろうに、そこに座るとは何事かと、僧は老女を非難する。すると彼女は、僧の叱責を次のように論破するのである。この卒塔婆は朽木に見える、しかし仏が刻まれている、自分は埋れ木のように卑しい、しかし仏心という花を失っていないから、卒塔婆が仏なら卒塔婆に腰掛けている自分は、その仏に手向けられた花ではないか。つまり、自分は仏花として卒塔婆に腰かけているのだ、というのである。

そのあとの僧との掛け合いは、才女小野小町の面目躍如たる場面である。

シテ（小町）：とても臥したるこの卒塔婆、われも休むは苦しいか

ワキ（僧）：それは順縁にはづれたり / シテ（小町）：逆縁なりと浮かむ

べし

ワキ（僧）：だいば提婆が悪も / シテ（小町）：観音の慈悲

ワキ（僧）：はんどく槃特が愚痴も / シテ（小町）：文殊の知恵

- ワキ（僧）：悪といふも / シテ（小町）：善なり
 ワキ（僧）：煩惱といふも / シテ（小町）：菩提なり
 ワキ（僧）：菩提もと / シテ（小町）：植ゑ木にあらず
 ワキ（僧）：明鏡また / シテ（小町）^{うてな}臺になし

このやり取りで小町は、前半、僧が提示する負の事柄をよいほうへ裏返していく。卒塔婆に座るのは善事（順縁）ではないと言われれば、人は悪事（逆縁）を契機として仏道に入る（浮かむ）と言り返す。悪人の提婆はどうなのだとなれば、観音菩薩の慈悲を備えて成仏できるとし、愚鈍な繫特も悟りを得た後は文殊の知恵の持ち主であると小町はいう。悪は善を導き出すし、煩惱は救いに通じるから、悪は善であり煩惱は菩提だとする。こうして小町は、物事の価値が固定していないこと、否定的な状況を通過して仏道への扉が開くこと、ないしは仏の慈悲が個人の行いや煩惱などを超えたものであるとする浄土教の教えを説得していく。これによって僧はむしろ小町に学び、最後二つの掛け合いで、小町と見方を一致させている。仏心を得た実りのたとえである菩提樹は樹木ではないし、悟りの鏡（明鏡）は人が使う台に載せた鏡（臺=台）でもない、と結ばれる。それまでは、僧は否定的なことで小町の論駁を促していたのが、最後二つの掛け合いでは肯定的なことを先に持ち出し、彼女の考えを先取りして発話しているのだ。

「卒塔婆小町」で演じられる小野小町に代表されるように、伝説の彼女は、落魄した驕慢な美女の成れの果てでは決してない。小町像の俗化は、近世以降の浄瑠璃や歌舞伎の影響なのだろうが、これにとらわれると、小町の終焉は驕慢の罰、美女であることの負債としか理解されなくなってしまう。他方、小町の物語がそのように狭量な人間理解に基づいているのであるなら、それが一千年あまりを生き延び各地に小町の供養塔を作らせたとは考えにくい。老女小野小町は、「卒塔婆小町」に著されたように、人がいかなる境遇からも仏心を学び得る存在であることを説得するとともに、生きながらにして浄

土の平和を得ることがいかに困難で、生きている限り揺り戻しに苦しみ続けなければならないのだということを、自ら体現しているのである。

観阿弥は「卒塔婆小町」の前半で、小野小町という伝説の女性理解を余すところなく描いている。彼女は人としての尊厳を保ち、存在の悲しみを知っており、老いることも自分の過去も受け入れている。それは小町自身の自己認識である。他方、後半では自らを「小野小町が成れの果て」と名乗り、彼女に恨みを抱く深草少将の霊に取り憑かれて別人と成り変わり、「あら人恋しやあら人恋しや」と狂乱する。後半の小町は社会の目に映った彼女を表しており、俗世の見方で自らを見つめれば、「恥づかしき我が身かな」としか言いようのない立場にいるとする。しかし彼女は、自分のために苦しんだ少将の霊と苦しみを共有し、少将が仏身に救われると同時に自らも救われる。すなわち彼女は、俗心と仏心との狭間にあって真剣に苦しむ人間の代表である。そして、このように、先に逝った霊との邂逅、時間と感覚の混乱、執着からの救済といった全てが、鳥辺野という生死の境界域空間で繰り広げられるのである。

小栗判官——深泥池と鞍馬

深泥池と鞍馬を大事な舞台とするのが、説経節『小栗判官』⁹⁾である。鞍馬の毘沙門に両親が祈って授かった男子、^{ありわか}有若（後の小栗判官）は、長じて常陸小栗と名乗る優秀かつ血氣盛んな若者となった。親の用意した縁談で結婚はするものの、様々不満を述べては次々に離縁してしまい、18歳の2月から21歳の秋までに72人と結婚し、すべて里に返してしまうという、わがまま放題の若殿である。いかにも粋をはみ出た彼は、自分が鞍馬の申し子（鞍馬の神様をお願いして授けられた特別な子供）だということで、これという妻を鞍馬の神様をお願いしようと考えて、二条の屋敷から北へ向かう。そして深泥池に到着するのである。ここで小栗は笛を吹き、その姿を池の大蛇に

見初められる。そして、鞍馬寺の入口で若い女（実は、大蛇の変身した姿）を見つけると、彼女が運命の妻だと信じてしまう。しばらくして小栗は、蛇と通じていると人々に知られることになり、都から追放された。その後、舞台は関東から近畿南部の熊野まで広がる。小栗は話の途中で殺害され冥土の入口へも行くので、この物語の空間は壮大である。その六道巡り的な旅の出発点に、深泥池と鞍馬がある。

説経節が成立したと考えられている14世紀頃の感覚からすれば、この物語で小栗が移動する空間は、冥土も含めると、人々が認識するほぼすべての世界をカバーしていると思われる。小栗の遍歴の始まりが、市原野の入口である深泥池なのは、何か意味のあることであろう。先に触れたように、わがまま放題の小栗が運命で定められた妻を授けてほしいと鞍馬へ祈願に行く途中、彼はふと深泥池の端で止まって、笛を吹く。それは池の大蛇の耳に届いた。

あら面白いの笛の音や この笛の^{おのこ}男子を一目拝まばやと思ひつつ 十六丈の大蛇は二十丈に伸び上がり 小栗殿を拝み申し あらいつくしの^{おのこ}男子や あの男と一夜の契りをこめばや と思ひつつ […]

大蛇は思ったのだ。こんなにうまく笛が吹け、見栄えも良いこの男と一夜を過ごしてみたい、と。それで、蛇は数え年16,17歳の姫に変身して先に鞍馬へ行く。そして、彼女自身があたかも神からの贈り物であるかのように、しかし実は蛇の身なので神の領域には入れず、寺へ上がる階段の一番下に立って、小栗を待った。姫を見つけ喜んだ小栗は、彼女を玉の輿に乗せて二条の屋敷へ連れて帰り、ぞっこんになってしまう。ところが、深泥池の大蛇と契っているという噂が広まり、親の仕置きを受けて常陸の国（茨城県）へ流されるのである。

小栗は生命力が異常に盛んな人物で、そもそも普通の人間とバランスよく

夫婦になれる器ではなかった。その力はよく働けば世の中のためになるが、放埒にまかせれば三年半で72人の女性を不幸にするほどのものである。常陸へ流されても続く彼の熱心な妻探しは、若者小栗が有している野生の力を社会秩序の枠の中で生かすために、むきになって援助を探して回っていると理解できる。小栗が最終的に出会ったのは、やはり神の申し子である照手姫で、小栗は彼女をも強引な手続きで妻にしてしまうにも関わらず、照手の固い信頼を得る。照手は、小栗に対するその人並み外れた愛情を多大な犠牲を払って守り抜き、小栗の救済を導き出す。

小栗は身勝手が過ぎたため、照手の実家で毒を盛られて一度死ぬ。それまで小栗が自らの毒によって荒らして回った社会秩序から、毒によって追放されるのだ。ここで物語を復習してみよう。小栗は鞍馬で親に授けられた。放埒の後、鞍馬に妻を探しに行き、市原野に踏み込む時に深泥池の大蛇を無作為とはいえ自らの笛で呼び出し、結果的に京の都へ大蛇を連れ込んでしまった。その勢いのまま、照手姫の実家で親の許しもなく彼女を自分のものにしてしまう。つまり、彼の源泉力すなわち毒の仕込み場は、深泥池から鞍馬に至る空間である。

深泥池は先にも述べたように、鞍馬街道が山間部に差し掛かる入口にある湿地で、氷河期からの植生が保存されている特異な池である。水中には枯れた植物が堆積し、中央に浮島がある。深い藻に湖底を覆われ全体に淀んでいるため、陸とも水域ともいいがたい曖昧な雰囲気をもっている。山の合間に窪んである池で、水は有機物で濁り、水底は深いとも浅いとも計りかねる景色から、大蛇の住処だという伝説も生まれたのであろう。確かにこの



深泥池

池には、モヤモヤとした怪しい生命の存在を感じさせるものがある。

さて、照手の実家で毒を盛られて冥土に送られた小栗はどうなったのか。もうすこし『小栗判官』の粗筋を続けたい。小栗は毒殺されるものの、一緒に殺された家臣たちが閻魔大王に小栗の助命を懇願するので、大王は埋められていた小栗の死体に霊を戻した。そして小栗は、無残な姿でこの世に生還する。生きてはいるが身体は死体そのものの「餓鬼阿弥」となって土車に乗せられ、人々が順に車を引いて、リレーのように小栗を移動させてくれた。行き先は熊野であった。熊野本宮の湯の峯で湯に入れば、閻魔大王は薬湯を遣わして小栗をもとの身体に戻すと約束したからである。小栗を預けられた藤沢の僧は、小栗の移動を人々に託す時、次のように書いた板を小栗の胸に吊りしていた。餓鬼阿弥小栗の土車を引くことは、祖先の供養になると人々は告げられたのだ。

この者を、一^{ひとひ}引き引いたは、千僧供養、二^{ふたひ}引き引いたは、万僧供養
(この者が乗る土車を一引きすれば千人の僧が供養の経をあげたのに等しい弔いができる。二引きすれば、一万人の僧が供養の経をあげたのに等しい弔いができる。)

死体同然の小栗は、人々にリレーされつつ移動し旅をする。土車上の哀れな人物が小栗だとは知らない照手もまた、夫の小栗の供養にと大きな犠牲を払ってまで、狂ったようにこの車を引く。下女として奉公していた美濃国の青墓宿(岐阜県大垣市青墓付近)から大津の関寺(滋賀県大津市にあった。謡曲「関寺小町」では、小野小町の庵が付近にあったとされる)まで、土車を引いた。そして別れ際に、病気が治ったあかつきには、青墓宿の常陸小萩(照手の別名)を訪ねてきてくれと、胸の札に書き加えた。その後小栗はついに熊野本宮の湯峯に着いて、もとの身体を取り戻す。

ここから話はまだ続くのだけれど、京都からはすっかり遠ざかってしまっ

たので、深泥池から鞍馬に至る地域のことに関心を戻そう。小栗は鞍馬で命を授かり、深泥池で大蛇を呼び寄せてしまった。蛇との交わりの結果、都を追放されて、次は照手姫のいる世界に入ることになり、その世界を乱し、彼女もろとも死あるいは死に等しい経験をくぐり抜けることになった。にもかかわらず、照手の捨身の供養によって再生の方向へ動き出す。こうした小栗はたいへんな迷惑者、世の中を転覆させて既存秩序を変えるトリックスターである。この物語において、深泥池から小栗を通して生者の世界に送り出された毒は何だったのか。悪意がないのに悪として働いてしまう彼の力を、善の力に変換するために、欠かせない援助者であった照手とはいかなる人物と理解すればいいのだろうか。

小栗に取り入った深泥池の大蛇は、京都で小栗が享受していた快樂や精神的怠慢、傲慢などの化身なのだろう。小栗は鞍馬で自分自身の化身（大蛇＝姫）に出会い、現状に淫したために都からは遠い常陸国へ流されるのである。他方、照手は聡明だが人目に出ない田舎の姫で、稀なる美女との噂はあるものの驕ることなく貞淑である。しかし、正式な手続きを踏まないまま小栗を好きになってしまって夫として迎えたので、小栗は父に殺され、自分も死の淵をくぐり抜けて下女となる。その苦難の末にも、あくまで亡き夫への貞節を守り続け、彼の供養のために土車を引く。そうした照手の行動は、男性中心社会に都合の良い女性像を読者に押し付けているとも読め、他方では、社会の仕組みが男性の欲望中心に動き男性原理で人が処罰されることへの批判指標であるともいえる。特権階級から追放された後の彼女の強さ、貞節への固い意志は、彼女を性奴隷として売り買いしようとする社会に対する命がけの抵抗である。だから、その照手が、社会秩序を乱す小栗を再び社会へ、しかも役立つ人間として社会へ戻す影の立役者となり得たわけは、彼女が強靱で鋭い社会批判者だからなのだ。

説経節『小栗判官』において、小栗は姫に変身した深泥池の大蛇を通して自分の放埒な本性に淫し、常陸国の照手姫を通して剛健な本性を生かす道を

得た。小栗の放埒と転落の始まりは、すべて京都の中心部で開示している。こうしてみると、深泥池から鞍馬への空間は都の墮落を可視化し、既成秩序に揺さぶりをかける鏡だと思われる。伝岩佐又兵衛の小栗判官絵巻『をくり』では、「大蛇」は龍として描かれ、三浦俊介氏の指摘によれば、『菟芸泥赴』(北村季吟、1684)にも深泥池は「龍神勸請の池とぞ」とある¹⁰⁾。深泥池の大蛇は人間規模で秩序を乱す悪ではなく、人間の力を超えてこの世に揺さぶりをかける龍神であり、小栗の墮落によって活性化し、小栗を一度死なせる方向へ導きながら真の為政者として、また荒人神として甦るきっかけをつくる力なのである。

鉄輪——鞍馬街道を貴船へ

市原野を抜け鞍馬街道を北へ進むと、鞍馬川が東の鞍馬川と西の貴船川に別れる際へ着く。そこが貴船口である。鞍馬川は京都の人々にとって大事な賀茂川の水源であるので、この周辺は穢すことがはばかれた。それ故か貴船神社は水の神のいらっしゃる所として知られているが、私にとってはむしろ、謡曲「鉄輪」¹¹⁾の印象が強く、女性のやり場のない苦悶に耳を傾ける神がいる場所である。平家物語・剣巻にある宇治の橋姫伝説を下敷きにしているといわれるこの作品は、作者不詳のわかりやすい曲だ。人の心の闇を一面的に扱っているという点では世阿弥の能などに比べて芸術性に劣ると感じられるが、曖昧さを残さない分、無辜に傷つけられて鬼女と化した女性の悲しみや恐ろしさが直截に伝わってくる。川沿いの冷やかな湿気を帯びた山奥の空気が、舞台の底流にある。

夫に去られて絶望した女が復讐を祈念して、貴船神社に丑うしのこくの刻参りをする。午前二時頃に神社に詣でて願をかけるというものである。女は、前夫と別れて以来の恋心を抑圧し、自分から去って別の女性を選んだ男への憎しみや嫉妬に突き動かされて、神に復讐の願いを聞き届けてもらおうと「頼みを

かけて「貴船川」に沿って足早に、闇夜を突いて歩いていく。何度も願掛けに通っているのであろう、その道行が、女（シテ）によって以下のように謡われる。

通ひ馴れたる道の末、通ひ馴れたる道の末、夜も糺^{ただす}の変わらぬは、思ひに沈む^{みぞろがいけ}御菩薩池、生けるかひなき憂き身の。消えん程とや草深き、市原野への露分けて、月遅き夜^よの鞍馬川、橋をすぐれば程もなく、貴船の宮に着きにけり、貴船の宮に着きにけり。

下鴨^{ただす}の糺の森を沈む心で通り抜け、深泥池（御菩薩池）では生きる甲斐もないと絶望し、市原野を行くときには、生い茂って夜露に濡れた草を分け進む。月明かりを頼りに貴船川沿いを北へ向かえば貴船口の橋があり、それを渡れば貴船神社に着くという。復讐の願を懸けるためのこの道程こそ、彼女の胸の中に押し込められた負の感情が、異界のエネルギーに転換し解放を約束されるまでの空間である。

貴船神社に着くと、夢に神意を聞かされた社人が彼女を待っていて、鬼になりたいという彼女の願いを神が聞き届けられたと知らせる。家に帰って、赤い衣をまとい赤く顔を塗って、頭には鉄輪（五徳）を逆に被ってその鉄の台の三本の足にロウソクを灯し、怒りの心を持ってば、たちまちに鬼神となりますよ、と告げられるのである。喜び勇んだ女はみるみるうちに鬼の形相となり、来た道を引き返す。後半は舞台が中京に移り、新妻が鬼女に襲われかけるが、安倍晴明が用意した形代^{かたしろ}（身代わりの人形）を鬼女が打ち据えたので難を免れる。次に鬼女は、前夫（と思い込んだ形代）にも襲いかかろうとするが、悪鬼払いの番神に追われて姿を消す。

簡単にまとめるとこういう物語で、前半のクライマックスは女が心をはやらせて貴船に向かう夜の道行である。全てが寝静まった闇の時間に、都の中心を離れ森を抜け、池の端を通って草はらを過ぎてから、川沿いに木々が鬱

蒼と茂る山道を登っていくのである。その道を行く間に、彼女は、死を思うほどにも日常で押し殺していた怒りと憎しみを徐々に解放し、「鬼」という負の感情の現し身と化す。境界域のこの空間が、貴船神社の神の御告げが示すように、鬼となって生き延びることを彼女に許すのである。言いかえれば、この空間は、既成の社会で理不尽な仕打ちに苦しむ者の声に耳を傾け、復讐という形で批判をあらわにする行動を認める、別の権威に支配された世界である。

後半のクライマックスは、前夫と彼の新妻の寢床に着いた鬼女が恨みと悲しみを吐露するところだろう。あるいは新妻と思い込んだ形代を打ち据える場面ともいえる。どちらの場面でも、女の感情は言葉や行為という形をとって復讐の対象に向けて発散されている。しかし、都の空間では、鬼女の行動は日常の人間の秩序に押し返されて中和されてしまう。すなわち、恨みの言葉は発せられても、安倍晴明の調伏のために眠っている前夫の耳には届かず、復讐の鞭が振り下ろされた相手は後妻ではなく人形であった。現実世界に実害が及ばなかったのである。これは、市原野を含む洛北の境界域が、既成秩序の矛盾を吸収し緩和する役目を担っていたことを示している。夫に裏切られた女性の嫉妬と執念が鬼と化することを貴船の神は許し、それを日常の世界に戻すことによって、鬼としてむき出しになった彼女の怒りはそこの外を外し、弱められた。そして彼女自身は、諦念を胸にして再生するのである。

『御伽草子』に、「貴船の本地」¹²⁾ という物語がある。本三位の中将定平^{さだひら}は、妻にと迎えるどの女性も気に入らず、1年に990人も返してしまう。ところが扇に描かれた女性に恋をしてこの女性を探すうち、鬼国^{きこく}に「毘沙門の妹、吉祥天女」にも勝る姫がいると知らされる。「ひしやもんの御いもうと、きちじやうてん女と申とも。これにはいかて、すくれはし。」そして、鬼国^{きこく}の入り口は深泥池のところにある。「大なるいけあり。そのなを、みぞろいけと申也。そのをくに、大きなるあなあり。そのあなよりゆけは國あり。其國

のなをは、きこくといふ。」定平は、毘沙門天の示現によって鬼国の姫に出会い、ともに鬼国へと赴くが、鬼国の王（姫の父親）に阻まれ姫とは離別する。殺された姫は人間として生まれ変わり、定平に再会して結婚、最後に二人は貴船の神々になるという話である。

三浦俊介氏の『神話文学の展開』によれば、この話は以下のような神話的特質を持つ「死と再生の神話」であるという。

『貴船の本地』の特色は、語り手・書き手が貴船神社に付属していることだけを絶対条件とするのではなく、鞍馬と関わる修験道の「生まれ清まり」という再生儀礼、人間という存在からより高次な神に近づくための長くて苦しい巫覡の「成巫儀礼」、邪悪な食人鬼の身から『法華経』の守護神へと転じた十羅刹女に対する信仰など、幾重もの「死と再生」の思想をまとめて成り立っている。¹³⁾

「貴船の本地」における鬼国の姫の話も、前項で上述した小栗の妻嫌いと深泥池の大蛇との契りの話も、深泥池から鞍馬・貴船に至る地域が異界と日常世界との境界空間であることを示し、同時にそこが、「鉄輪」にも明らかなよみ黄泉がえりの出入口であったことを明らかにしている。

おわりに

中世の京都は、洛中と洛外を合わせてみると、よく仕組まれた都市であった。少なくとも伝説や文学作品においては、都とその周縁の空間は、総合的に人間の精神世界と重なっている。秩序や平和は常に矛盾を孕み、利を得る者と奪われる者を作り出すが、奪われ放逐された者にも都の周縁という居場所が与えられていた。そして、周縁に追われた者の声に耳を傾けることによって、たとえ既成の状況に乱れや苦痛を招くとしても、いずれ秩序は刷新

され安定を保証されるのだということを、伝説や伝説に基づいた作品は知らせてくれている。京都とその周縁部との関係が示していること、すなわち、周縁に放逐された者の声が社会の新秩序を導き出すきっかけになるということは、現代についてもあてはまるだろう。また、表向きの中心部と中心部の矛盾が寄って集まる周縁部とを持つ中世京都の地図は、人の心の暗喩だともいえる。私たちがいま、自分の心の中に京都図を持ち、表向きの日常と日常の矛盾を批判する心的空間とを意識できるとしたら、それは、私たち自身の精神の不断な再生のために、あながち時代遅れのことはないと思う。

注

- 1) これらの地域が葬送の地として人々に意識されたのは、平安時代中期のことであるという。(高橋康夫『洛中洛外：環境文化の中世史』149-150頁)
- 2) 片桐洋一『小野小町追跡』66頁
- 3) 小林保治「能の「小町物」：栄華と衰頹・貧窮」『国文学 解釈と鑑賞』60巻8号、53-59頁
- 4) 立命館大学アトリサーチセンター「日本芸能・演劇 総合上演年表データベース」による。
- 5) 「通小町」『謡曲集上』75-80頁
- 6) 錦仁「陸奥の小野小町：秋田の説話に焦点をあてて」『国文学 解釈と鑑賞』60巻8号、66-72頁
- 7) 井上頼寿『京都民俗志』51頁
- 8) 「卒塔婆小町」『謡曲集上』81-88頁
- 9) 「をぐり」『古浄瑠璃 説教集』160-246頁
- 10) 北村季吟『菟芸泥赴』1684年(『新修京都叢書』第12巻、臨戦書店、1971年)本論では、三浦俊介『神話文学の展開：貴船神話研究序説』357頁の引用を使わせていただいた。
- 11) 「鉄輪」『謡曲集下』349-352頁
- 12) 「貴船の本地」(承応明暦頃刊丹緑本)『室町時代物語大成』第4、69-92頁
- 13) 三浦俊介『神話文学の展開』272頁

主要参考文献

- 明川忠夫『小町伝説の伝承世界：生成と変容』勉誠出版 2007年
 ウェルズ恵子「月になった小野小町：パウンドとフェノロサによる能の翻訳とパウンドの

- 小町像』『岩波文学』3巻2号、132-141頁、1992年
- 荒木繁、山本吉左右編注『説教節』東洋文庫243、平凡社、2009年
- 井上頼寿『京都民俗志』岡書院、1933年
- 大西庄之助編『小栗判官一代記・初編』国文学研究資料館、2006年
- 小野幸子「小野小町変貌：説話から能へ」『日本文学誌要』第84号、21-28頁
- 片桐洋一『小野小町追跡：「小町集」による小町説話の研究』笠間書院古典ライブラリー（1975）1993年
- 京都地名研究会「地名ものがたり」『京都新聞』2019年1月20-26日
- 『特集 小野小町と和泉式部：才女をめぐる実像・虚像』国文学・解釈と鑑賞60巻8号、至文堂、1995
- 小松和彦「能の中の異界（11）貴船—『鉄輪』」『観世』71巻6号、2004年、62-67頁
- 信多純一、阪口弘之校注『古浄瑠璃説教集』新日本古典文学大系90、岩波書店、1999年
- 小林文広、高木博志、三枝暁子『京都の歴史を歩く』岩波新書、2016年
- 小山弘志、佐藤喜久雄、佐藤健一郎校注・訳『謡曲集一』『謡曲集二』日本古典文学全集33、34、小学館、1982年
- 竹本幹夫『鉄輪』檜書店、2001年
- 高橋康夫『洛中洛外：環境文化の中世史』平凡社、1988年
- 栃尾武『玉造小町子壮水書・小野小町物語』岩波文庫、2009年
- 中西宏次『京都の坂：洛中と洛外の「境界」をめぐる』明石書店、2016年
- 錦 仁『小町伝説の誕生』角川選書2004年
- 西野春雄校注『謡曲百番』新日本古典文学大系57、岩波書店、1998年
- 馬場あき子『鬼の研究』ちくま文庫、1988年
- 三浦俊介『神話文学の展開：貴船神話研究序説』思文閣出版、2019年
- 三島由紀夫『近代能学集』新潮文庫、2005年
- 湯浅佳子「小野小町伝説の一系譜：病める小町の話」『東京学芸大学紀要 第2部門、人文科学』51号、295-300頁
- 横道萬里雄、表章校注『謡曲集上』日本古典文学大系40、岩波書店、1960年
- 横道萬里雄、表章校注『謡曲集下』日本古典文学大系41、岩波書店、1963年
- 横山重、松本隆信編『室町時代物語大成』第4、角川書店、1976年

